

易に關する一二の考察(上)

津田左右吉

一周 易

二 漢代に於ける易の新解釋

三 支那思想に於ける易の地位

一周 易

人間生活のやみ難き欲求によつて發生し特に其の未開時代には如何なる民族の間にも大なる權威を有つてゐた所謂 *divination* は上代支那に於いても種々の材料と方式とによつて行はれてゐた。或る學者のいふが如くそれを *voluntary* と *involuntary* とに區別するならば、龜卜と蓍筮とは前者の重要なるものであり、占夢や望氣候歲乃至所謂天文等は後者の顯著なるものである。これらは何れも文獻の上には知られ知識社會の間に行はれ彼等によつて形成せられたものであるが其の起源は民間の風習にあるのであらう。勿論民間の風習としては其の他にも種々雑多の簡易な方式のあつたことが、多くの民族の事例からも類推

せられる。divination が人間生活の必要から自然に生じたものであるとすれば、さうして人の意思を加へること無くして幾様かの變つた現象が起り得る事物を材料とする、或はさういふやうに仕組まれた、人爲の方法が voluntary divination であり、自己の上に無意識に、或は外界に自然に、現はれることで、奇異に感ぜられ不規則に思はれ、而も其の現はれ方に幾らかの變異のある現象によるのが involuntary divination であるとすれば、其の材料もしくは方式は到るところに於いて容易に求め得、定められ得るのである。たゞそれが特殊の知識社會によつて、或はそれを職業とするものによつて潤色せられ構造せられると、非常に複雑なものともなり煩瑣なものともなり、又たそれに種々の理説が附會せられて來るので、著筮や天文の如きものが其の例である。所謂周易とはかういふやうにして形成せられた著筮の法をいふのである。

今傳はつてゐる周易の形を成したのが何時であるかは明かでない。人も知る如く、論語述而篇には孔子の易を學ぶについての感想があり、子路篇には恒の九三の爻辭と同じ文があるから、孔子の時代には既に今の易ができ上がつてゐたとすべきやうであるが、論語の記載がすべて孔子の言行を録したものととして信用し得べきかどうかは問題であるので、詩書を引用してゐるところについても考ふべき餘地は多い。⁽¹⁾ 従つて易についても、論語の記載は且らく論外に置かねばならぬ。また詩の小雅、林、杜の章に卜筮のことがあるが、詩の作られた時代についても從來の通説は容易に肯ひ難いから、これも亦た今のところ考慮に加へ

かねる。それから尙書の洪範に龜筮のことがあつて、此の洪範は、五行思想がそこに重要な地位を占めてゐることから見ても、戰國時代の作らしいが、こゝに筮といふのは今の形の周易によるものであるか、又はそれが出來上るまでの過程の中にあつた或る方式をさしてゐるのか、よくわからぬ。楚辭に收めてある屈原の卜居にも龜策のことが見えてゐるが、これもまた所謂策の内容はわからず、此の文が果して屈原の作かどうか、問題である。或は又た孟子にも、現存の墨子にも、詩書を多く引用してあるに拘はらず、易のことが見えてゐないから、其のころまだ易ができてゐなかつたのでは無いかとも思はれるが、後にいふやうに、易が經典として重んぜられたのは新しいことでもあり、さうして占筮の書たる易は政治を論じ、仁義道德を説く孟子などに引用せらるべきものとも限らないのであるから、輕卒にかう推測しかねる。墨子公孟篇に筮をよくするものゝ話を載せてあるのも、今の形をなした易のことか、どうか不明である。戰國策の齊策四の、宣王の時の話としてあるものに、易傳の語が引いてあるが、全體に今傳はつてゐる戰國策の記載を一々文字通りに其の時の其の人のことばとして信ずることができるかどうかが問題である上に、此の語の引いてある話は事實として甚だ疑はしいものであり、又た其の語も今の十翼のうちには見當らないやうである(文言傳中の一句と少しく似てはゐるが同じでは無く、又た其の語調も易傳中のものらしく思はれぬ)。だから、これも亦た證據にはしかねる。要するに此の點については明白な文獻上の徵證は無い。ところが洪範には龜が筮と並べて擧げてあり、而も龜を先にし、筮を後

にしてゐる其のいひ方から見ると、龜卜の方が箸筮よりも重要視せられてゐるやうである。なほ尙書の君奭にも卜筮とあり、金縢、大誥、洛誥などには卜のことは見えるが、筮のことは無い。それから呂氏春秋孟冬紀に、命太卜禱祠龜策占兆審卦吉凶とあつて策を用ゐる筮も太卜の掌るところとせられてゐる。これらもやはり同じことを語るものである。呂氏春秋の記載は、勿論机上の官制であらうが、かういふ官制の作られたのは筮よりも卜を尊ぶ思想が基になつてゐるとしなくてはならぬ。また左傳僖公四年の條に、筮短龜長とあり、周禮春官大宗伯に易筮を大卜の管するところとしてあるのは、後にいふやうに、何れも漢人の筆になつたらしく思はれるものながら、やはり此の思想の現はれであつて、禮記の表記に、天子無筮、諸侯有守筮とあるのが天子のことについては、龜卜のみを用ゐるといふ意味ならば、これも亦た龜卜の著筮よりも重んぜられたことを知る一材料である。なほ史記の始皇本紀と孝文本紀とは、龜卜のことが見えてゐるので、事實、秦漢時代にも帝室に於いてその尊崇せられてゐたことが知られる。さて斯ういふ事實なり思想なりは、周易の形成せられたのが新しいことであるため、それが廣く用ゐられるやうになつた後でも、おもたゞしい *divination* としては昔から一般に行はれて來た龜卜が主位に置かれてゐたことを示すものでは無からうか。

さて龜卜の書は漢書藝文志に多く、其の名を擧げてあるが、今日には傳はつてゐない。けれども前にいつた史記の記載、または左傳や國語に見えるところから考へると、龜の坼裂の

文様によつて例へば易の卦の如きものが定められ、それについて占または繇といはれた辭が作られてゐたらしい。かういふ方式の立派に整へられたのは、勿論、卜人もしくは知識社會の人々のしごとであらうが、龜卜そのことは極めて古い時代から民間に行はれてゐた風習であつたに違ない。動物を殺し其の臟腑などの或る現象によつて吉凶を占ふことは、世界に例の多い *divination* の方式だからである。もつともそれは咒術もしくは祭祀の場合の犠牲などによることが多いやうであつて、それに現はれるところが神の啓示として考へられるのも此の事實と關係があるが、龜もまた神聖な動物と見られてゐたのであるから、龜卜の本來の意味は、其の坼裂によつて神自身の啓示を知ることであつたらう。それならば著筮はどうかといふと、これも民間に於いて、幾條かの著もしくはそれに類したものを用ゐる簡単な占ひかたがあつて、そこに起源があるのではなからうか。Herodotos によると *Skythen* の風俗にさういふことがあつたらしい。其の方法の詳細は固よりわからぬが、木條などの數を數へることが少くとも其の過程の一部であつたらう。物の數を數へて占ふことは現に我が國でも行はれてゐる。さすれば上代の支那人にもそれに似たことがあつたと見るのに無理は無からう。これについても其の方法などはわかりかねるが、それから發達したと認むべき易から逆推を試るならば、やゝ發達した方式としては數なり又は其の奇偶なり或は數へる回数なりに應じて彖辭もしくは爻辭のやうなものが幾つか作られてゐ、それによつて占ふのでは無かつたらうか。また、易が蜥蜴のことであつたとすれば、それもまた或

は上代人が此の動物の色の變化によつて占ひをしたことがあり、それから轉じて廣く *divination* をさす語となり、再轉して著筮の術にも適用せられるやうになつたのかも知れぬ。易の名は蜥蜴が日に十二變するところから來たといふやうなことは支那の學者も既にいつてゐる(たゞ彼等は名をそれに借りたといふのであつて、それによつて占をしたことに起源があるといふのでは無い)。しかし周易の特色は八卦もしくはそれを重ねた六十四卦が純然たる數理的の組合せによつて成立してゐることであるが、これは決して文化の程度の低かつた古い時代から傳へられた民間の風習と見ることは出來ぬ。龜卜は坼裂の文様もとなつてゐるが、易はそれとは違ひ、初から全く摸するところの無い、抽象的觀念を象徴した卦によるのであるから、これは必ず知識あるものゝ頭から出た考案としなくてはなるまい。さうして「卦」といふ語が本來は龜卜に於て用ゐられたものであつて、易はそれから此の名を借りて來たものらしいことを考へると、易の卦が作られたのは龜卜の方式が一通り形成せられた後のことであり、又たいくらかはそれに倣つたのもあらうと思はれる。(卦といふ名が龜卜から轉用せられたといふのは、此の字が卜に从つてゐること、史記始皇本紀及び李斯傳の龜卜のことを記したところに此の語が用ゐてゐること、などからの推測である。龜卜には別に兆といふ語もあるが、史記孝文本紀の卷首の記事によれば、それは卦と同じ意義らしい。兆も卦も坼裂の文様によつて形成せられた幾つかの型をいふのであらう。)

しかし易は一朝にして今の形に出來上がつたものとは思はれぬ。詳しいことは後に述

べるとして、大きな點の二三をいふならば、第一、六十四卦が八卦を組み合はせたものとせられ、其の八卦の逐一に特殊の名があり、さうして六十四卦の卦をば、例へば艮下巽上とか坎下震上とかいふやうに、八卦のそれ／＼の名を重ねて呼んでゐることから考へると、初から、六爻を有する六十四の卦が作られたのでは無く、三畫だけの卦、即ち八卦のみによつて占つた時代があつたのではあるまいか。さうして六十四卦は、或る時期を隔てた後になつて、それを組合はせて作つたものではあるまいか。繫辭傳などに八卦といふ語が屢用ゐられてゐるのも、それが世間にいひならされてゐる稱呼だからであつて、それは又たかういふ歴史的事實に由來してゐるのでは無からうか。(庖犧や文王に關する從來の傳説はもとより問題とすべきものでは無いが、六十四卦の成立にかういふ過程のあつたことを認めたのは正しい推測である。)或は又た、後にいふやうに、八卦の逐一に附與せられた意義がそれを重ねて六爻の卦とする場合に於いて始めて用をなすものであることを思ふと、此の八卦といふものは六十四卦の形成せられた時、單に思考の上の過程に於いて設けられた一階段に過ぎないもの、或は六十四卦を構成する方式として考へ出されたものであつて、八卦のみが實際の占の上に用ゐられた時期は無かつたのだと見られるかも知れぬが、八卦の卦の逐一の意義は、後にいふやうに、それを重ねた場合に於いて實は無意義になるものが多いから、此の見解は無理であらう。六畫を組合せて六十四卦とすることが一時に出來たとしては餘りに複雑に過ぎることをも考へねばならぬ。第二に六十四卦が作られた後になつても、爻辭の如

きは初からあつたかどうか疑はしい。筮法は全體としての卦を求めるのが目的であつて、六爻の一々を定めてゆくのは其の過程に過ぎない。さうして占ふのは卦によるのであつて、爻によるのでは無いから、一々の爻に意味を有たせる必要が無く、従つて爻辭といふやうなものを作るに及ばないのである。もし又た前項に述べた如く八卦のみで占ふ時代があつたとすれば、其の時代に、さういふ簡單な方式でありながら三畫の一々に意義を附するやうな煩雜なことがしてあつたとは思はれない。第三に、繫辭傳に見えるやうな筮法が最初から定められたと考へることも困難であらう。策數の五十は兎も角もとして、分掛揲扚の面倒な方法は如何なる人の考慮から生まれたとしても、一朝にして案出せられたらしくは無い。だから今日の形に於いての易が出来上るまでには、何様かの歴史があつたに違ない。さうしてそれは全然民間の風習とは關係の無いことであつて、中には實際の占ひとしては必要の無い、いはゞ思想上の遊戲さへも加へられて來たらしい様子が見える。

易が特殊の知識階級によつて作り出されたものであることは陰陽といふ形而上學的觀念が其の思想的側面をなしてゐることによつても知られる。八卦の基礎をなす所謂剛柔二畫の形、一と一とが抽象的觀念の象徴であるとすれば、それは陰と陽とを現はしたものであらう(これが具體的の何物かを摸したのでは無からうかといふ考もあるが、さう推測すべき理由が十分でない)。よし其の初に於いては陰陽といふやうな概念が明かに象徴せられてゐなかつたにしても、少くとも漠然たる *daiana* の面影がそこに現はれてゐることは許さ

ねばなるまい。が、それを數理的に組合せて八卦をつくるやうな思想の程度から考へると、寧ろ初から陰陽思想によつて形成せられたと見る方が妥當であらう。もしさうとすると、八卦の組立てにも、陰陽の交錯によつて宇宙の萬象が成立するといふ思想が、寓せられてゐるとしなくてはなるまい。易と陰陽思想との關係については別に後に述べようと思ふが、今はたゞ之によつて易が如何なる階級の社會に生まれ出たかを説かうとしたのである。さて八卦は此の剛柔二様の畫を三畫づゝ組合はせることによつて出來たものであるが、此の三といふ數の用ゐられたのは、それが一種神聖な數として一般に尊重せられてゐたのと、組合はせて出來る卦の數が八つになり、煩雜にならぬ程度の變異がそれによつて生ずるからであつたらう(天地人の三才に擬したといふ繫辭傳の説の如きは、後から考へられた説明に過ぎないやうである、後文參照)。占ふべき人事は無限に多樣であるが、知らんとするところは畢竟吉凶の二に過ぎないのであるから、これでも事は足りよう。しかし本來抽象的の形象を數理的に組合はせるのであるから、それは幾らでも複雑にすることが出来る。さうして卦の形の變異が多くなれば多様な人事を或る程度までそれに配當し得られる。或は又た種々の理説をそれに結合する便宜が生ずる。八卦を重ねて六十四卦としたのは、恐らくは占ひそのことの實際上の必要からよりは寧ろ斯ういふ知識上の欲求から出たことではあるまいか。或はそれによつて占筮を意味深きものにし、それに高遠の觀あらしめようとする意圖が加はつてゐたかとさへも思はれる。かの煩雜な筮法の形成せられたのもや

はり同じやうな動機から來てゐるのではあるまいか。占筮は特殊の職業として取扱はれ
たに違ひないからである。

以上は易の成立した事情についての考察であるが、之によつて見ると、今の形の易が成立
つたのは、極く大まかにいつて、戰國時代であることがほゞ推測せられる。もう少し狭めて
いふと、其の中ごろ以後ではあるまいかと思はれる。陰陽といふやうな形而上學的觀念は
戰國時代になつてから世に現はれたものらしいこと、數理的の組合せによつて六十四卦を
作ることが、全體にさういふ抽象的な考へ方の發達した後で無くてはならず、又たそれは戰
國時代から行はれはじめた五行思想と數の觀念や事物の取扱ひ方に於いて相通ずる點の
あること、六十四卦の基本となつてゐる八卦が龜卜の法の整頓したよりも後に作られたも
のらしいこと、戰國末になつても、占ひとしては易が龜卜より輕視せられてゐたやうに見え
ること、これらを互に參照して考へると、上記の推測に大過の無いことが肯はれるやうであ
るなほ後文參照。

さて周易の經は其の卦名も彖辭も又た爻辭も、それだけ見たのでは意味がわからぬ。そ
れは剛柔二爻を數理的に組合はせたのであるから、一々の爻にも六爻から成立つてゐる卦
にも、本來、特殊の意味のある筈が無く、従つてそれに意味をつけたのは、何人かの獨りぎめに
過ぎないからである。まして一定の數の爻と卦とによつて無限に多様な人事を占はうと
するには、如何なる場合にも附會し得られるやうに曖昧な意味をつけねばならず、また占筮

を職とするものからいへば、曖昧であればあるだけ意味深げに見え、目前の問題に對し巧にそれを適用することによつて彼等の技倆が示され、彼等の地位が保たれるのである。だから我々が所謂十翼、特に彖傳象傳や說卦傳などの助を借りなければ謎の如き此等の文字を解することの出来ないのは、當然である。さて說卦傳には六十四卦の基本である八卦の一に與へられか意味、或はそれによつて象徴せられるやうに説かれた事物が列擧してあつて、これは抽象的な卦の形に現はれてゐる變異を宇宙と人生との種々相に適用するについて必要の考へ方ではあるが、これがそもく無理なしごとである。本來意味の無いものに意味をつけるのだからである。剛柔二種の畫が陰陽思想から成立つてゐるものとすれば、乾坤を天地とし父母とするには理由があり、震を雷とし龍とすることなども全く縁が無いでは無いが、其の他については概ね牽強附會であり、巽を風とし兌を澤とし坎を水とし離を火とするなど、其の理由がよくわからぬ。(坎とか離とかいふ名についていふのでは無く、卦の形についてのことである。こじつけは如何やうにもできるので、例へば☲は陽が陰を包み☱は陰が陽をつゝむといふやうな解釋もあるが、離と坎とについて斯う説くのは、多分漢代以後の思想であらう。)方位の配當の如きも、亦た多くは其の故を解し難いが、特に乾坤を西北と西南としたのは極めて奇異である。乾坤は純陽純陰であるから南と北とに適するやうであるが、離と坎とが火と水とになつてゐてそれが南北にあてられたので、おのづから他の方位に附會せられるやうになつたことが推測せられはする。けれども、此の配當は

反對の性質を有する卦が反對の位置になつてゐないだけでも甚だ其の意を得ない。なほ易の形成せられたと同じ時代から世に行はれてゐる五行説とは同じ事物についても趣を異にしてゐる場合の多いことをも參考するがよい。五と八と基本の數が違ふから一致しない點の生ずるのも當然であるが、一致し得べきものも一致してゐず、而もそれは五行説の方が合理的であり、少くとも組織だつてゐ、整然としてゐる。八卦の方は、例へば乾に西北と金と赤とを配當したやうに、大體は、別々の考から別々の事物をあてはめたので、堅剛の義から金を、陽の色であるから赤をもつて來たものゝ、其の金と赤と、並に方位の西北との間には關係が無いやうであるが、さうばかり定まつてもゐず、寒や氷がやはり乾に結合せられたのは西北の方位から來てゐるらしく、考へ方が亂雜である。さうして同じ色についても乾を赤としたのと巽を白としたのとは同一觀念から出たものと思はれず、全く色を配當して無い卦もある。もつとも現在の説卦傳は、易の形成せられた後に於いて、それを應用する占筮家のために書いたもの、少くともさういふ意味が含まれてゐるものらしく、又たそこに列擧せられてゐる觀念や事物は、後にいふやうに同じ類例がいくらでも増加せられ得る性質のものであり、従つてそれについては事實上幾度も手が入つてゐるのではあらうが、根本の考へ方は今の形の易が成立した時から存在してゐたのであらう。しかし八卦の案出せられた最初からかういふ意義が與へられてゐたかどうかは疑問であり、上文にも述べた如く、もし果して八卦のみで占つた時代があつたとすれば、それには何か別の取扱ひ方があつたの

では無からうか。説卦傳の説の如きは八卦のどれかを二つ重ねて六畫の卦とする場合に於いて始めて意味があるからである。しかし其の場合とても實は無意味になるものが多いが寧ろ剛柔二爻の配置と其の關係的地位とによつて卦の性質の定められることが多いのであるが、これは八卦の一人にどういふ意味が與へられるにしても、其の二つの意味を關係づけることによつてのみ六十四卦の一人の性質を定め、それに意義を附けることが不可能だからである。八卦を重ねて六十四卦とすることは單純な數理的の組合せであるから、八卦の一人に與へられた意義がそれと共に二つづゝ結びつけられて、それそれの一つの觀念となり、それが六十四卦の一人の上に現はれ得る筈が無い。即ち無意味な組合せが多く出来るのである。語をかへていふと、三畫の卦を二つ重ねるといふことゝ六畫の卦を一卦として見るといふことゝが一致しないのである。だから説卦傳に見えるやうな考は、それだけでは意味をなさぬものでありながら、八卦の重ねられた六十四卦に於いてはすべてがそれに準據せられるのでは無く、卦名をつけたり象辭を定めたりするには、少くとも、それとは別の考が加はつて來なければならぬことが明かである。次に此の二様の考へ方が六十四卦の性質を定めるに當つて、如何に易の上に現はれてゐるかを觀察しよう。

第一は上下(外内)兩卦の關係によつて、即ち六爻を有する卦は八卦の何れかの二つを重ねたものとして考へることであるが、其の一は八卦のそれ／＼を天地雷風水火(日)電(山)澤といふやうな事物の象徴として見るのである。象傳に乾下坤上の泰を「天地交而萬物通也」と

いひ、坤下乾上の否を「天地不交而萬物不通」とし、又は坤下離上の晉を「明出地上」とし、巽下離上の鼎を「木巽火享飪也」といつてある類が、それである。これらは上下兩卦の配合に上記の意味を有たせることの可能なる卦だからであるが、それは數に於いて寧ろ少い。象傳には何れの卦にも殆ど器械的に此の意味で上下の兩卦を結合して説いてあるが、乾下坎上の需に「雲上於天」といひ、坎下乾上の訟に「天與水違」といふ類は、水を雲とし又は「違」の一字を着けた點に窮策を弄した嫌がありながら、なほ意が通ずるけれども、乾下艮上の大畜を「天在山中」とし、乾下兌上の夬に「澤上於天」といひ、艮下坤上の謙を「地中有山」としてゐる類は、二つの觀念の結合が全く無意味であつて、かういふ取扱ひ方をすべての卦に適用するのが極めて無理であることを示してゐる。よし又た二つの觀念が無理で無く結合せられるにせよ、それと卦の意味とは沒交渉である場合が多い。例へば離下巽上を「風自火出」とし、坎下震上に「雷雨」といふが如きは、それだけでは無難に聞こえるけれども、家人と解との説明としては何等の意味が無い（牽強附會の辯はどうでも出来るが）。ところが、象傳でも象傳でも其の結合法には一定の準則が無いので、其の間に往々矛盾がある。象傳が前に述べた坤下乾上の否について「天地不交而萬物不通也」としたのは、天氣上升し（乾上）地氣下降して（坤下）天地が交らざる象だといふのであつて、これは其の反對の泰が乾下坤上で天地相交ることを示すと共に、上下の兩卦によつて象徴せられてゐる天と地とが現在の地位から離れてこれから更に動かうとする状態についていふのであるが、艮下坤上の謙に「天道下濟而光明、地道卑而上行」とある

地道の上行はそれとは違ひ坤が既に上行して現在の地位にあることをいつてゐるらしい（兌下離上の際に「火動而上澤動而下」とあるのも、上下といふ語の用例からいふと、やはり既に動いた後、現在の地位を得てゐる有様についていふのでは無いかと思はれるが、これは且らく疑問として置く）。もし坤下乾上と乾下坤上とを此の謙と同じ考で解釋するならば前者は天が既に升つて上にあり地が既に降つて下にあり、天地各々其の處を得て泰であり、後者は之に反して天地みな其の位を失つて否となり、經とは正反對の意義が附せられ得るのである。又た象傳が泰否に就いて彖傳と同じ説明をして置きながら、例へば兌下坤上の臨に就いて「澤上有地」といひ、乾下震上の大壯について「雷在天上」といふ如く、天と地とについて卦に現はれてゐる上下の地位を其のまゝ定まつたものとしてゐるのも、同じ矛盾である。もし泰と同じやうな考を震と乾との重ねられた卦に適用するならば、震下乾上の無妄は雷が天に上らんとするの象とでも云ひ得るのであるが、それには全然かういふ觀念は無く、却つて大壯について上記の如くいつてゐるのを見るがよい。のみならず、彖傳に於いては、乾や離に何時でも上升する意があるとはせられず、坤や澤に下降する意があるやうに説かれるとは限らないので、さういふ考がまるで顧慮せられてゐない場合が多く、又た上に述べた如く謙に於いては坤が上行することにさへなつてゐる。又た泰に於いては上升する天氣と下降する地氣とが相交るといふのであるが、離下兌上を革としたのは「水火相息」といふので、上るべき火と下るべき澤と、相衝突すべき性質を有する二卦が共存すると見たゝめであら

うから此の考へ方をもし乾下坤上に適用するならば、それは天地の争となつて泰では無くなる筈である。それからまた、水火相息は離下澤上よりも寧ろ離下坎上に適切であるのに、それにあてはめなかつたのは、此の卦を既濟として別の取扱ひ方をしたからであらう。また象傳でも、例へば巽下乾上の姤と巽下兌上の大過との如く、或る場合には巽を風とし他の場合にはそれを木とし、また例へば離下兌上の革と離下震上の豊との如く、或る時は離を火とし他の時はそれを電とし、これも亦た一定してゐないのである。

第一の二は同じく説卦傳によりながら前項の如き具體的の物象で無く、例へば家傳が乾下坎上の需に「險在前也、剛健而不陷」といひ、兌下離上の睽に「行説而廉乎明」といひ、坤下艮上の剝が「順而止之」とせられた如く、物象の性質や、八卦の名の文字言語などから聯想せられる何等かの觀念や、即ち後人の所謂卦徳を用ゐることであつて、家傳には此の方法で上下兩卦の意味を説いてゐることが多い。或は又た泰や否に於いて、一方に天と地とで乾坤兩卦を解釋しながら、他方では「内健而外順」といひ、「内柔而外剛」といふやうに物象を離れた觀念での説明をも施し、二つの方法を混用することもあり、時には坎下艮上の蒙を「山下有險」とする如く、かういふ觀念と其の基礎になつた物象とを一つの概念に結合することもある(後の方の例は少い)。さてこれは、畢竟上下兩卦の名を意味ある言語に翻譯したまでのことであつて、其の取扱ひ方は甚だ器械的であり、又たそれは卦名とも家辭とも一致しないものである。例へば上記の「順而止之」は剝といふ觀念とは何の交渉も無いでは無いか。遂とか姤とか或る

少數の卦に於いて全くそれが省かれてゐるのも、あまりにふさはしくないからのことかも知れぬ。又た斯ういふ説き方が互に矛盾することもあるので、後にいふやうに離下巽上の家人には内卦を女外卦を男とする思想が含まれてゐるが、内柔而外剛は恰もよくそれに適合してゐるに拘はらず、否に於いてそれを説かねばならなかつた。女の柔にして男の剛なるは、思想の上には、寧ろ泰なるべきである。それから家傳の此の考へ方は、同じく器械的の附會ながら、雲上於天といひ、上火下澤といひ、山附於地といひ、或は、山下出泉といつてゐる如く、物象そのものについていふ象傳の説とは、全く意味が違つてゐるのである。其の三は、乾坤を父母とし震坎艮巽離兌をそれ、長男中男少男、長女中女少女とする考を適用することであつて、離下兌上の革、兌下離上の際、二女同居の語があり、艮下兌上の咸に、男下女と記されてゐるのが其の例であるが、二女同居は巽下兌上の大過、離下巽上の家人などに、又た、男下女は震下兌上の隨にも坎下巽上の渙などにもいひ得べきことであるに拘はらず、それが記して無い。要するに六十四卦の性質を定めるために上下兩卦に與へられた意義を結合する場合にも、其の意義のとり方、結びつけ方は勝手次第である。本來説卦傳が八卦の一事についてあれほど種々な事物や觀念を列擧してゐるのは、さうしなければ、それを重ねた多くの卦に意味をつけることが出来ず、多様な人事に配合することも出来なためであるから、これは當然のことであるが、それが即ち易の本質でもあり、又た後にいふ如く支那人の考へ方の一特色でもある。

第二は剛柔二爻の配置と其の關係的地位とによつて考へることであつて、それは概していふと六畫を有する卦を不可分の一卦として見るのであり、よし其の中には、上下外内兩卦の重ねられたものとする考へ方が痕迹をのこしてゐる場合があるにしても、其の兩卦に別別の意義をば與へないのである。さて其の一は、下卦と上卦との中位にある第二爻と第五爻とに特に重きを置いて、それが剛柔の何れであるかを見ることであつて、例へば坎下坤上の師に「剛中」とあり、艮下巽上の漸を「剛得中」といつてゐるのは九二と九五とを指し、離下乾上の同人、艮下震上の小過などに「柔得中」とあるのも六二、六五についていふのである。其の二は所謂應爻を見ることであつて、兌下坤上の臨、震下乾上の无妄に於いて「剛中而應」とあるのが九二と六五と、九五と六二との關係をいふのであり、離下兌上の睽、巽下離上の鼎について「柔：得中而應乎剛乾」といつてゐるのが六二と九五と、六五と九二との交渉であり、又た巽下震上の恒が「剛柔皆應」とせられてゐる類がそれである。應といふ語は小畜、大有などに於いては別の意味に用ゐられてゐるが、それは後にいへう。以上の二つの場合では、六畫の卦を上下兩卦の重ねられたものとする考がなほ少しく遺つてゐるが、其の三として擧ぐべき爻位の觀念に至つては全然それが無くなつてゐる。それは初爻を剛とし、第二爻を柔とし、第三爻以上も其の例に従つて剛柔代る／＼其の位置にあるべきものとする考であつて、其の最も理想的なのは「剛柔正而位當也」といはれてゐる離下坎上の既濟であるが、又た例へば艮下坎上の蹇は第二爻以上がそれにあてはまるので、やはり「當位」といはれてゐるし、又た艮下乾

上の遯が九五に於いて「剛當位」とせられ、艮下震上の小過が六五について「剛失位」といはれ、或は離下乾上の同人が六二に於いて「柔得位」とせられ、震下離上の噬嗑が六五について「柔……不當位」といはれてゐる如く、一爻についても位の當否が論ぜられてゐる。一爻だけについて斯う見ることは象傳に最も多くの例があるが但し此の場合では上下兩卦を區別して見る考とも結合し得られるので、離下巽上の家人を象傳に「女正位乎内男正位乎外」と説いてゐるのがそれである。これは六二と九五とが位が當つてゐるといふのであるが、卦の意味を家に附會したゝめ特に内外の觀念を借りて來、剛柔二爻を男女としてそれに結合したもので、それがために上下(外内兩卦)の區別をする考が再び導かれて來たのである。其の四は或る爻と其の上下の爻との關係を見るのであつて、巽下巽上の巽に「柔皆順乎剛」とあり、乾下乾上の履に「柔履剛」とあるなどが其の例である。これは剛爻もしくは柔爻の何れかゞ反對の爻の間もしくは上か下かにあつて、特に人の注意をひく場合に説かれるので、巽は初六と六四、履は六三についていふのであるが、其の最も著しく目につくのは一爻のみが他の五爻と反對になつてゐる時であるので、巽下乾上の姤を「柔遇剛也」とし、乾下兌上の夬に「柔乘五剛」といひ、又は乾下離上の大有に「柔……大中而上下應之」といつてあるなど、何れも其の爻と他の五爻全體との關係を説くのである。其の五は陰陽消長の理を寓することであつて、震下坤上の復を「剛長也」、兌下坤上の臨を「剛浸而長」とし、又た艮下乾上の遯に「柔爻について、浸而長也」といつてゐる類がそれである。これは例へば復の剛が第二爻まで進めば臨になり、そ

れが更に一爻進むと乾下坤上の泰となるべき勢にあることを暗示してゐるので、此の場合では剛が進むと反比例に柔は一爻づゝ退いてゆくのである。泰について、君子道長、小人道消といひ、否について、小人道長、君子道消といつてゐるのは、剛爻と柔爻とで君子と小人とを象徴させたので、説き方は間接になつてゐるが、其の根柢に同じ思想が存在する。

剛柔二爻の配置と其の關係的地位とによる考へ方の主要なるものは、ほゞ上記の數條に概括し得られるやうであるが、これらについても亦た一貫した準則があるのでは無い。例へば震下坎上の屯は「剛得中」とすべきものであるのに、それが説かれてゐず、坤下坎上の比と對照するがよい、艮下坤上の謙は九三が應爻を有つてゐるのに、それが論ぜられず、兌下乾上の履と對照するがよい、又た、震下巽上の益は「剛柔皆應」であるのにそれが考へられてゐない（巽下震上の恒と對照するがよい）。又た例へば離下坤上の明夷の四爻は「當位」であり、坎下艮上の蒙は大部分が「位不當」であるに拘はらず、それが閑却せられてゐるし、乾下艮上の大畜に於いては六五と上九との位を失つてゐることに注意せずして却つて上九を讚美しようとする。或は又た離下巽上が家人とせられてゐるのは、「女正位乎内、男正位乎外」の故であるが、これは寧ろ離下坎上（既濟）に於いて一層適切にあてはまる筈である。それから謙に於いて九三が顧慮せられずして上卦が地として説かれ、履または坤下震上の豫と比べて見るがよい、乾下震上の大壯、坤下巽上の觀、又は巽下乾上の姤などに於いては復、臨、遯などの如く陰陽消長の理が説いて無い。要するにいろいろ／＼な考を勝手氣儘に取入れてゐるのである。

さて陰陽消長の理が寓せられてゐると上文にいつたのは、現在の爻の配置に於いてのとではあるが、一步進んで考へると、其の柔爻もしくは剛爻によつて象徴せられる陰もしくは陽は過去に於いて或る状態から動いて來たものであり、又た現に動きつゝあるものであること、いひかへると推移の道程にあることを暗示してゐるやうである。漢代になると此の考がずつと發達して來るが、家傳などに於いてはまだそれがはつきりせず、又た力強く説かれるまでになつてはゐない。ところが、家傳では別の意味に於いて、爻の移動によつて生ずる卦の變化を説いてゐる場合が少なくない。其の第一は例へば震下乾上の无妄に於いて、剛自外來而爲主於内といはれ、或は坎下乾上の訟に於いて、剛來而得中、また坤下離上の晉に於いて、柔進而上行とせられてゐる類であつて、これは、无妄と訟との上卦の乾、晉のは下卦の坤を組成する剛爻もしくは柔爻の剛または柔といふ性質が下降しまたは上升し、それだけの卦の初九となり九二となり又は六五となつて現はれたといふのであり、其の考の根柢には、无妄もしくは訟の下卦の震もしくは坎が本來は坤であり、晉の上卦の離がもと乾であつたといふ考が潜んでゐるらしい。さうしてそれは、第二として擧ぐべきもの、例へば巽下震上の恒が、剛上而柔下、艮下兌上の咸が、柔上而剛下とせられる類に至つて、一層明かになつてゐる。此の例の前の方のは、乾下坤上であつたものが初九の剛爻が上つて九四の位置を占め、其の代りに六四の柔爻が下つて初六となつたことをいひ、後の方のは、坤下乾上であつたものが六三の柔爻が上六の位置に上り、其の代りに上九の剛爻が下つて九三となつ

たといふのである。震下兌上の隨に剛來而下柔動而説とあるのも其の例で本來初六と上九とであつたものが初九と上六とになり剛柔が其の地位を轉換したことをいふのである。柔が上るといはず動而説としたのは上卦の兌に適應する文字を用ゐたまでである。なほ損益二卦の損下益上また損上益下も同じことである。かういふ考へ方には或る幾つかの卦が乾下坤上もしくは坤下乾上いひかへると乾坤兩卦の組合せから變化して來たものであるといふ思想が潜在してゐるらしい。但し兌下離上の睽または巽下離上の鼎に柔進而上行得中而應乎剛とある柔爻は共に六五のことをいふのではあるが其れが上行したものだといふ意味は上記の二種の例とは違ふ。睽も鼎も其の下卦は坤でも無く又た上卦から剛爻の一つが下つて來たゝめに本來の坤が兌となり巽となつたのでも無いからである。乾坤二卦の組合せから變化して作られたといふ上記の卦の第一種は上下兩卦の一方が乾もしくは坤であり他の一方が前の場合には震坎艮の所謂陽卦後の場合には巽離兌の所謂陰卦で無くてはならず又た第二種は陽卦と陰卦とが重なつてゐなくてはならぬが睽や鼎の類は其の何れにもあてはまらない。だからこれらの卦に於いて六五を上行したものとするのは甚だ無理であつてそれは恐らくは上記二種の例を精密に考へずして其の類と見なし深く意を用ゐずして此の語をつけたのであらう巽下坤上の升到柔以時升とある柔もやはり六五をさしてゐるらしいから其の意味は之と同様であらう。従つて此の一例は論外に置いて差支が無いやうであるがさうすると爻を動くものと見る考へ方は上記の二種

の例に限ることになる。

さて爻の位置が動いて卦の變化が生ずるといふ考は、卦と卦との間に時間的關係をつけたのであるが、變化といふ觀念は無くとも、やはり一種の時間的關係を認めることは、八卦について述べてゐる説卦傳の所説にも見えてゐる。震坎艮を長男中男少男、巽離兌を長女中女少女とするのがそれであつて、これは前者は剛後者は柔が順。次初畫から第三畫までの位置を取るがために生じた變異であるといふ見解から出たことであり、卦と卦との間に順序が立てられ、卦の變異について時間の觀念が、おぼろげながら加へられてゐるのである。

「おぼろげながら」といつたのは、震☳の次に坎☵が來、其の次に艮☶が來るとし、一の所在が順次上位に置かれることにしては、あるが、震の初畫が進んで坎の二畫となり、更に進んで艮の上畫となるといふやうに、卦の形が畫の移動によつて變化するとは、説いて無いからである。卦の形に應じて順位はつけられてゐるが、卦の形そのものが、前のから順次に變化して生じたとはせられてゐないのである。（繫辭傳に陽卦が陰多く、陰卦が陽多しとせられてゐるのも、一陽畫と一陰畫とをとつて其の位置によつて卦を定め、陽畫によるのを陽卦、陰畫によるのを陰卦と稱するため、陽卦には却つて陰畫が二つあり、陰卦には二陽畫があるのである。）なほ説卦傳は八卦について別に「帝出震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、説言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮」といひ、またそれを上記の順序で東から南西を廻つて東北に終る八方位に配し、「萬物出乎震」といひ、「艮……萬物之所成終而所成始也」といつてゐる。これは、一方に於いて八卦の

全體に運行循環の理を寓してゐることを示すと共に、他方ではそれが剛柔二畫の位置の變化とは無關係に決められてゐることを語るものである。震☳の初畫が陽であり、それから次第に陽が加はつて來るとするならば、東南は☳、南は☳でよい筈であるのに、或は陽が漸次上に現はれて來るとするならば、東南を☳、南を☳としてもよいかも知れぬが、實際は東南は巽☴、南は離☲となつてゐる。又た☳が陽のはじめならば☳は陰の起るところでなければならぬのに、さうなつてゐず、震の反對の位置にあるものは兌☱である。離☲、坎☵を南北として反對の地位に置くのはよいが、☳が☳を前にし、坤☷を後にしてゐるのは☳が乾☰と艮☶との中間にあるのは、順位と卦の形との關係が一致しない。要するに、此の配當に於いては、八卦の順位が考へられ、それに時間的推移の觀念が附加せられてゐるが、それは八卦の形に應じて順位がつけられたのでは無く、形そのものがさういふ順序によつて變化して出來たものでは猶さら無いのである。(これは八卦の數が八方位のそれと同じであるがために、此の二つを結合し、さうして方位が一周してまた始に復るやうに順序づけられてゐるため、それに應ずるやうに八卦にも強ひて順位をつけたまでのことであらう。實は、八卦の形が順次變化して始に復るやうに、其のすべてを排列することは不可能なのである。)たゞ上記の三男三女の說に於いては、卦の形によつて順位が定められてゐるが、しかし其の順位にも意味にも、易に於いて最も多く用ゐられる八卦の配當、例へば坎を水とし、離を火とするやうなのとは、何等の交渉が無い。相互間の關係も順序も無い八卦に強ひて關係をつけ順

序を立てようとしてかうなつたのである。だから説卦傳に於けるかういふ觀念は、後から附け加へられた新しいものであることが知られる。さうしてそれがこんな不整頓なのである。(三男三女の説が新しいことは、傳の文に於いて、他の部分とは離れてこれだけがまとめて記してあることから推測せられよう。)

之を要するに八卦は剛柔二畫の數理的排列から生じた並存的の變異であつて、繼起的のものでは無く、それを重ねた六十四卦もやはり同様であつて、それは一つ／＼相互に獨立したものであるから、一の卦から他の卦が生ずるといふ時間的變化の觀念は勿論卦と卦との間の順位とても、本來の意味に於いては存在しないものであるが、それが新に加へられて來たのである。しかしこれもまた説卦傳や彖傳などでは十分に發達してゐなかつたので、それが力強く説かれるには漢代をまたねばならないのである。さうして前に述べた第一種の例には、剛爻について需、大畜、遯、大壯、および其の他の數卦、柔爻についても比、明夷、萃、漸などがあり、又た第二種としては、解、困、井、既濟などがあるに拘はらず、それらの卦に於いては斯ういふ考が見えてゐないのは、前に述べたいろ／＼の考と同様、其の卦其の卦について都合のよい思想を勝手に附會したからのことである。(1)なほ此の考も上下兩卦の存在を豫想してゐるのではあるが、爻が動くといふことは兩卦の區劃を破つての話であり、又た説卦傳によつて兩卦の一々に與へられてゐる意義は全然顧慮せられてゐないのである。

彖傳の六十四卦の解釋が或は上下兩卦の重ねられたものとして、或は不可分なる一つの

卦として、それを取扱ひ、二様の見かたをしてゐること、其の何れをとるか、は都合次第勝手次第であるといふことは、これまで説いて来たところで明かであらう。しかし其の主として取るところが何れにあるにせよ、多くは兩方を結合して説いてゐるので、例へば巽下艮上の蠱に、剛上而柔下、巽而止といひ、兌下震上の歸妹に、説以動、所以歸妹也、征凶、位不當也、无攸利、柔乘剛也といつてゐるなどが、其の例であり、屢々引いた兌下離上の睽に、火動而上、澤動而下、二女同居、其志不同、説而麗乎明、柔進而上行、得中而應乎剛とあるなどは、種々雑多の考へ方の最も多く混在してゐるものといへよう。これには卦名または彖辭の説明として必要な場合もあつて、歸妹の如きは其の例であるが、またさうでない時もあるもので、睽に於いては火と澤との關係、または二女の話の何れか一つが卦名の解釋もしくは其の由來を語るものとして無くてはならぬであらうが、彖辭はたゞ「小事吉」とあるのみであつて、それを説くためには「説而麗乎明」以下は必しも適切であるとはいはれぬ。が、それはともかくも、一つの卦の説明に於いても、かういふ風に種々の考へ方の混在してゐることは、雑多の觀念が如何やうにも取入れられ、又たそれが如何やうにも附會し得られるものが易である、といふことを示すものである。本來無意味なものに意味をつけるのであるから、これは當然である。陰陽交錯して宇宙の萬象が現はれるといふことには意味があり、剛柔二爻の交錯によつて生ずる卦の變異によつてそれを象徴するといふ大體の意圖にも肯はれる點があるけれども、六十四卦の一々に對して、ほんの僅かの變りしか無い多くの卦についても、それ〱に特殊の性質を

附與し、それ〱に特殊の人事を配當しようとするのが無理であることは、云ふまでもあるまゝ。

かう述べて來ると、ちのづから家傳などの歴史的變遷を考へて見る必要が生ずる。上にいつた如く、かういふものが無くては卦名や家辭の意味がわからぬから、それは卦名が定められ家辭が作られた最初から存在したのではあらう。よしはじめの間はそれが文字に記されなかつたにしても、占筮家の間に口傳として承けつがれて來たものがあつたらうと思はれる。が、今の家傳がもとの形のまゝであるかどうかは問題であつて、幾度かの増補なり變改なりを経てゐるのでは無からうか、と思はれる。さうしてさう思はせる證據が無いでも無い。泰の家辭に小往大來とあり否のに大往小來とあつて、これは泰に於いて陰の上にあるのを上行したも、陽の下にあるのを下降したものと見、否は其の反對であるとしたものらしいが、もしさうとすれば、泰と否との本來の意味は陽の來つたことゝ陰の來つたことゝにあるのでは無からうか。さうして天地の交ると交らざるとによつてそれを説いた家傳の解釋はそれと一致しないのでは無からうか。家辭では上下兩卦の現在の地位が大の往來した結果として見られてゐるが、家傳の上記の考へ方は、前に説いた如く、それは反對である。ところが家傳も一方ではやはり此の家辭を其のまゝに取入れてゐるでは無いか。のみならず、泰について「内陽而外陰、内健而外順」といひ、否について「内陰而外陽、内柔而外剛」といつてゐるのはやはり、上下兩卦の現在の地位によつて説明したものである。さう

して謙に於ける(多分、賤に於いても)上下兩卦の取扱ひ方が上に述べたやうなものであるとすれば、家傳に於いて天地の交不交を説いたところは後から加へられたものでは無からうか。爻についても下より上にゆき上より下に來ることは剛柔何れにも一樣に説かれてゐるから卦に於いても多分同様に考へられてゐたであらう。⁽⁵⁾ 下卦にある坤が更に下降するといふ觀念はこれから見ても特殊のものである。呂氏春秋の十二紀及び禮記の月令の正月に「是月也、天氣下降、地氣上騰、天地和同、草木繁動」とあり十月に「天氣上騰、地氣下降、天地不通、閉而成冬」と見え、禮記の樂記に樂を説いて「地氣上齊、天氣下降、陰陽相摩、天地相蕩」とあるが、泰否二卦の家傳の説は、それが天地を象徴する乾坤兩卦の重ねられた卦であるために、此の思想を借りて來てこゝに適用したので、それは既に出來てゐる家傳に後から加へられたものではあるまいか。上にも一言した如く此の二卦について陰陽消長の理を説いてゐるのも、内外兩卦の意義を結合して解釋するのとは態度が違つてゐるので、泰と否との家傳には種種雜多の考が混在してゐるらしい。それから卦名もしくは家辭と家傳の所説とが緊密に適合しないものもあるので、例へば小畜大畜、小過大過などは相對的の卦名であるに拘はらず、家傳ではそれが明かになつてゐないが、これらにも亦た變改の跡が見られるのでは無からうか。いひかへると、或る卦については、家傳が今の形を具へた時には卦名の定められた時の考が忘れられ又は閑却せられてゐたらしく見えるのである。しかし斯ういふ一々の場合は且らく措き、一般的に觀察しても、前に類例を擧げて列擧したやうないろ／＼の考へ

方は、それらが一時にできたとするよりも時を追うて次第に發生し次第に加はつて來たとする方が合理的では無からうか。剛柔二爻の上下を説いたり、爻位を論じたりすることは卦名や家辭の説明としてはよしそれと矛盾しないまでも必しも必要で無い場合があるが、必要で無いものゝ存在するのは後から加へられたゝめでは無からうか。本來一貫した考へ方によつては意味がつけられないものであり、又た論理的な思考の力に乏しい上代支那人のこともあるから、單純にかう決めてしまふわけにもゆかないが、一人の作者の頭から出たにせよ、引續いて行はれた幾人かのしごとであるにせよ、あれほどにいろ／＼の考へ方の生じて來たことには少くとも、順序があつたに違ない。さうしてそれは、八卦の組合せによつて六十四卦が作られたといふ事情から推測すると、説卦傳に見えるやうな上下兩卦の意義を結合することが最初の考であり、其の次には兩卦の區別をすて剛柔二爻の配置を主として見るやうになり、時間的推移もしくは變化の觀念を加へ卦と卦との間に繼起的關係があるとすることが最後に生じたものではあるまいか。いひかへると、大體余の上文に敘述した順序が即ちそれに當るのでは無からうか。さうして今の家傳には、それらが混合して現はれてゐるので、あの形がしまるまでには、それは或は短かい時間に於いてのことであつたかも知れぬが、種々の變改が行はれたのであらう。同じく上下兩卦の意義を結合して説くにせよ、家傳のと象傳のとが全く違つてゐて、其の間に何等の聯絡の無いのが多く、時には例へば蒙の「山下有險」と「山下出泉」との如く、其の思想の矛盾してゐるものさへあるのは、か

ういふ考へ方そのものに於いても變化のあつたことを示すものである。

以上は主として象傳の記載により卦の意義が如何にして定められたかを考へたのであるが、卦名や象辭そのものも今傳はつてゐるのが最初に定められたまゝのものでは無いかも知れぬ。象辭に於いては屯大有隨、または睽などの例の如く、元亨利貞とか、元亨とか、元亨利貞、無咎とか又は、小事吉とかいふ、簡單に吉凶を示してゐるものがあると共に蒙、蠱、復、夬などの例の如く可なり長文になつてゐて、吉凶を示すにはさして用の無い別の思想が結合せられてゐるものもあるが、これも卦によつては象辭が後から増補せられ又は變改せられてゐることを示すものかも知れぬ。もう一段溯つていふと、多くの卦については如何やうにも異なつた意味が附與し得られ、現に上に説いた如く、考へ方次第では、泰が否で否が泰でもよく、既濟が革でも家人でもよい程であるから、少數の卦に於いてどう見ても適切であると思はれるものゝ外は、必しも今傳へられてゐる卦名に限らないのである。又た卦名の全體を列べて見ると、それには種々雑多な事物や觀念が混在してゐて、それは決して一定の意匠から出たものではないから、これもまた別の事物や觀念を如何やうにも附會し得られる。だから卦名従つて卦の意義についても、事實何等かの變改が行はれてゐるかも知れず、象辭の例から見てもさう考へられなくはないのである。

なほこれと關聯して考ふべきは六十四卦の順序である。これは既に支那の學者も説いてゐるやうに、一つの卦と其の爻の順位を逆にした卦とを二つづゝ組合せて例へば屯、隨の

次には蒙☶が來るやうに配置し、たゞ乾坤、坎離、頤、大過、中孚、小過の八卦は逆にしても同じ形になるから、此の八卦に限つて、其の爻の剛柔の性が、もとの順位のまゝで、うとど反對になつてゐる卦を、例へば坎☵の次には離☲が來るやうに、上記の順序で、四組に組あはせてある。たゞ此の二卦づゝの組合せも、泰と否と損と益と、既濟と未濟と、乾と坤と、坎と離となど、極めて僅少の例の外は、卦名とも、象辭とも、又た象傳などの所説とも、殆ど交渉が無く、卦の性質の上から見ると何の意味も無いことである。又たかういふ取扱ひ方は、六爻の卦を不可分なる一つのものとして見たものであることに注目しなければならぬ。さうして全體としての六十四卦の順序、いひかへると上記のやうにして作られた三十二組の順序、に如何なる意味があるかは、乾坤二卦が首に置かれてゐることの外は、すべて不明である。序卦傳の所説の如きは此の順序の定まつた後に強いて附會したものらしく、其の説明の多くは何のことかわかりかねる。しかしそれが六十四卦の成立の由來、即ち八卦を重ねたものであるといふこと、とは全然無關係になつてゐることだけは明かであるので、其の一々の卦が上下兩卦を重ねたものとして取扱はれてはゐないといふことが、こゝにも示されてゐる。かう考へて來ると、今傳はつてゐる周易の卦の順序が六十四卦の初めて作られた時から定められてゐたものであるかどうか、疑はしいので、臆測ではあるが、もとは八卦を重ねることゝ何等かの關係があるやうな順序になつてゐたのではあるまいか。少くとも、上に述べたやうな意味で二卦づゝを組合せたのは、六爻の配置または其の一々の爻の剛柔の性といふ點からのみ

卦を見てゐるといふことから推測して、後に生じた思想の所産であらうと思ふ。たゞ變改の行はれた證據をたづねることの出来ないのは遺憾である。(小畜と大畜とは相對の名であるが、一は乾下巽上、他は乾下艮上で、下卦の乾である點が一致してゐるから、もとは並べて置かれたのでは無いかとも思はれるが、小過と大過とは艮下震上と巽下兌上とで、上下兩卦のいづれに於いても聯絡が無く、又た損と益とが兌下艮上と震下巽上とで、其の點ではこれも互に縁が無いから、これらの例からいふと、さう推測すべき理由は薄弱である。) たゞ序ながらこゝで注意して置きたいのは、かの三十二組の順序について一定の準則があるらしく見えないのは、一つは此の順序の定められた時代に卦と卦との關係が重要視せられてゐなかつたゝめであつて、それは又た當時、六十四卦が並存的のもの、相互に獨立してゐるものとして考へられてゐたからであらう、といふことである。卦と卦との關係に就いて時間的推移もしくは變化の觀念がよし發生してゐたにせよ、それはまだ萌芽に過ぎなかつたのである。二卦づゝの組合せも器械的のものであつて、それに内的意義は無い。たゞ乾坤坎離などの八卦を四組にしたことだけは爻の變化、即ち剛が變じて柔となり柔が變じて剛となることの觀念がそれに導き入れられ得るものであるけれども、其の觀念から此の組合せが案出せられたので無いことは、他の五十六卦が全然それとは違つた意味で組合せられてゐることからも明かである。

さて以上述べて來たところから推考すると、爻毎に辭をつけることが後になつて行はれ

たものであらうといふ上文の臆測が、別の理由から確がめられることになる。爻辭では六爻の卦が一つのもの、と見なされてゐる、上下兩卦の重ねられたものであるといふ考がそこにけ取り去られてゐるからである。たまにはそれを顧慮して書かれたものもある、例へば泰の九三の爻辭は象傳の説明に「天地際也」とあるによれば、下卦の乾の上爻であることを示してゐるが、かういふのは偶然の思ひつきから來たことである。概していふと、六爻の辭がみな同一着想から出てゐて、それは卦名と彖辭とに基づいてゐること、履、震、小過、未濟などに見える如く、或る爻辭が彖辭と全く同じである場合もあり、又た上に述べた如く位の當否を論ずることが象傳に多いが、それは既に爻辭に含まれてゐる思想らしいこと、など、種々の點から見て、かう考へられる。然らば何のためにこんな爻辭が作られたかといふと、それは、一の爻に重きを置いてそれによつて卦の意味を考へるやうになるにつれ、單に爻の剛柔の配置とか其の相互關係とかを説くのでは満足ができず、一步進んで一々の爻そのものに意義を有たせようとするところから來たのであらう。かういふ風に一々の爻が重ねられ、て來ると、上下兩卦を重ねたものといふ考が輕んぜられるのは當然であるが、又たそれが輕んぜられて來たから、かういふ爻辭も作られたのである。畢竟易そのものゝ取扱ひ方が細かくなつたのであるが、それは主として知識上の問題であつて、必しも占筮の必要から生じたことでは無い。繫辭傳に「所樂而玩者爻之辭也」とあるのは、爻辭の作られた後の話ではあらうが、また製作の動機の一つとしても考へ得られる。本來占筮の書であるから、吉とか凶

とか無咎とか有悔とかいふやうな文字は加へられてゐるし、それについては、民間に行はれてゐた簡単な占ひに於いて斯ういふやうなものがあつて、其のいひあらはし方などが學ばれてゐるかも知れぬ。又た爻辭が作られ、ば占筮のためにもそれが利用せられるので、或は三百八十四爻にそれ／＼の辭のあるのが多様な人事に逢遇して其の吉凶を斷ずるには便宜でもあり、或は占筮そのことを奥秘にするに都合がよかつたでもあらう。爻辭が謎の如きもので、象傳の解釋が無くては、或はあつても意味のわかりかねるものが多いことには、後世の禪語の如く當時の俚諺や俗語などを多く利用してゐるといふやうな事情もあらうかと推測せられるが、占筮家の便宜から故らに難解な文字をつらねた氣味もあらうと思はれる。なほかの繫辭傳に見えるやうな複雑な占筮の方法も、また六爻の一々を面倒な手續で定めてゆくことが爻を主として取扱ひ、それを手重もにするといふ點に於いて、之と同じ精神の現はれである。しかし一方から云ふと、爻の一々に重い意味を有たせることは却つて爻の相互關係、又は卦の全體に於ける一爻の地位によつて一卦としての意味を定めることとは、其の精神に於いて調和しない點がある。(爻の剛柔は簡單に定めることができる。例へば手にした策を數へ、其の奇偶によつて決めてもよいので、易に用ゐられた最初の方式は、多分、こんなことであつたらう。繫辭傳に見える如き繁雜な手續は畢竟むだなことである。もつとも繫辭傳の記述だけでは詳しい方法がわかりかねるが、やはり後世に行はれてゐる如く九と八と七と六との數が得られるやうになつてゐたのであらう。たゞ「乾之策二

百一十有六、坤之策百四十有四」とあるのが九と六との數によつていつてゐるらしいこと、爻の剛柔を定めるには奇偶各々一つの數を求め得らるればよい筈であることを思ふと、そこに幾らかの疑問はある。爻の剛柔を示すに九と六との數を以てすることが何時から行はれたかも問題であるが、筮法から來てゐることは推測せられるから、これもまた考へ合はされる。けれども四十九の策から九と六とのみを得、七と八とが出ないやうにすることは不可能であらうから、此の疑問の解釋は容易で無い。或は七は九と、八は六と共に同じ奇數偶數として取扱はれたかとも思はれるが、斷言しかねる。⁽⁹⁾

更に一言すべきは、爻辭そのものにもまた其の根本に於いて互に一致しない思想を含んでゐることである。乾の卦の爻辭は初九の潜龍に始まり九二の見龍を經、九五の飛龍となり、上九の亢龍に終つてゐて、九三と九四とは龍の字が見えないが、全體の着想は一爻毎に陽が進み、九五に於いて最も盛となり、上九に至つては其の極まるところにあることを示してゐる。六爻が一陽一陰其の位を交互にしてゐるといふ考は全然それに見えてゐない。然るに象傳には上に述べた如く到るところに此の考が現はれてゐて、それは爻辭にも存在する思想らしいから、そこに矛盾があるのである。(爻の位は六爻の位置についていふ一般の規準であつて、或る卦の爻の剛柔をいふのでは無いから、純陽の乾にもそれは具はつてゐる筈である。一々の爻について位の當否が論ぜられるのも此の故である。)これは爻辭も亦た一貫した考で書かれてゐないことを示すものであらう。勿論、爻辭は數が多いのと、一

一の爻に意味をつけることが卦よりも一層勝手次第であるとのため、よし卦名や象辭にもとづいて作るにせよ、如何やうにも書き得られ、従つて又た種々に變改せられ得るものであるから、上記の矛盾もそんなところから來てゐるかも知れぬが、又た初から統一が無かつたものとしても解せられよう。

さて六十四卦の今の順序の定められたことや爻辭の製作やが後人のしごとであるとするれば、今の象傳に、それから後に加へられた變改のあることが知られる。象傳が屯に於いて「剛柔始交」といつてゐるのは、此の卦が乾坤二卦を承け、剛柔二爻の交錯してゐる諸卦の最初に置かれてゐるからに違ない。此の卦に限つて斯う説くべき特殊の理由は卦の形そのものには認められないからである。それから需に「位乎天位」とあり、履に「剛中正履帝位」とあるのが共に九五をさし、大有の「柔得尊位」が六五をさすのならば、それは乾の九五の爻辭の「飛龍」を帝王の象徴と見てのことであらう。(此の飛龍は潜龍、見龍や亢龍に對する觀念であつて、乾の第五爻を陽の最も盛なる位置と見ての着想ではあるが、それが帝王を象徴したものは考へ難い。それから爻辭に帝王のことをいつてゐるのは必しも第五爻に限らない。けれども後に五を帝王の位とすることになつたのは、此の乾の爻辭にもとづいたものらしい。)以上述べて來たところを概括すると、周易はもと八卦だけであつたものが後に重ねられて六十四卦となり、又たさうなつた後にも種々の異なつた考が勝手次第に取入れられ、幾らかの變改潤色が或る年月の間に行はれたらしい形迹がある、それがために今の形の周易に

は種々の考へ方種々の思想が混在してゐる、それは卦といふものが抽象的觀念の象徴である剛柔二畫の數理的の組合せであるから、それを如何やうにも複雑にすることが出来、また如何なる意味をも附會し得られ結びつけ得られるためである、しかしそれにも大體の傾向はあるので、上下兩卦を重ねて一卦が作られるといふ考が漸次薄らいで六爻の卦を一つのものと見るやうになり、従つて爻の配置や其の相互關係に重きを置いて、それによつて卦の性質を定め、更に一步を進めて一爻毎に意味をつけるやうになつたこと、並に卦と卦との間に繼起的關係がつけられ、或は卦の成立について變化の觀念が導き入れられるやうになつたことがそれである、といふのである。だから一口にいふと、易は八卦もしくは六十四卦の初めて成立した時の思想からは段々遠ざかつて來てゐるのである。さてこれは主として説卦傳、彖傳及び象傳の所説について又たそれによつて考へたのであるが、それらの傳は何れも、易の作者および其の系統を傳へたものゝ述作潤色であることが推測せられる。が其の思想は一般の知識社會に通有なものであつた。中を得ることを尊び、或は天地、或は上下の感應を説き、又た貴賤の位を正しうすることを論ずるのは、先秦の文獻の到るところに見えてゐる思想であるが、上に述べた爻の配置に關する説明は即ちその適用せられたものである。それから時間的變化の觀念が加へられたのは、本質的には並存の關係である五行が運行循環する繼起的のものとして説かれるやうになつたのと同一現象であつて、それに後はいふやうな上代支那人の考へ方の特色が含まれてゐる。なほ變化といふことは、繁

辭傳に於いて易の一般的理論として反覆説かれてゐるが、それは、一つの卦に於ける剛柔二爻の性もしくは其の配置が變化し、それによつて他の卦が生ずるといふのでは無く、爻の配置そのものが多様であるといふ意味らしい。「在天成象、在地成形、變化見矣」といひ道有變動故曰爻、また爻者言乎變者也といひ或は剛柔相推而生變化、或は剛柔立本者也、變通者趣時者也といひ、何れも此の意味で解釋すべきものであらう。「變動」といひ「生變化」といふやうなことばを用ゐてはゐるが、それが、剛柔二爻の配置をいろいろにすることによつて多くの卦が出來るといふ意味であることは、六爻之動三極之道也とあり、方以類聚物以群分吉凶生矣、または、兩儀生四象、四象生八卦などの動の字、生の字の用例からも知られる。「變化者進退之象也」とか「變通配四時」とかいふ語を見ると、時間的變化の觀念があるやうにも見えるが、前の「進退は人間もしくは萬有の進退の諸現象に應ずる多様の卦があるといふこと、後の「配」の字から見ても四時の運行をいふのでは無く、四時の同じからざることを指すに過ぎないことが知られよう。多くの註釋家が此等の語をすべて時間的變化の意味に解してゐるのは、後の思想を以て古の文を説いたのである。しかしかういふ「變化」の觀念がものづから時間的變化の思想を導いて來る傾のあることは疑が無い。

ところが繫辭傳には易そのものとは無關係な別の思想が結合せられてゐる。其の一は筮法の説明に歷數を利用したことであつて、揲之以四、以象四時、歸奇於扚、以象閏五歲、再閏故再扚而後掛といひ、乾之策二百一十有六、坤之策百四十有四、凡三百有六十、當期之日といふの

がそれであり、數の近接してゐるところから、かういふ附會を試みたものらしい。前のにある「五歳再閏」の五の數が筮法に些の因縁も無いことは、此の附會の無意味なるを示すものである。同じところに記してある「天數二十有五、地數三十、凡天地之數五十有五」がやはり筮法と何の關係をも有たないことを參照するがよい。(三爻を三才に擬して説明するのが三爻の本來の意味で無いといふことは、これからも類推せられる。)其の二は政治的觀念を結合することであつて、前に述べた陽卦陰卦の説明に「陽一君而二民、君子之道也、陰二君而一民、小人之道也」といつてゐるのがそれである。君は剛爻、民は柔爻をさす。以上の二つも亦た後に説くやうに漢代に至つて盛行に行はれたことであるが、其の先驅がこゝにある。もつとも繫辭傳および文言傳、序卦傳は説卦傳、象傳及び象傳よりも後の製作らしく、特に繫辭傳は全體が頗る亂雜であつて、或る年月の間に幾人かの手で増補せられたやうに見え、又た後に述べるやうな理由もあつて、それが今の形になつたのは漢代に入つた後かと思はれるから、これも亦た其の時代に書かれたものかも知れぬ。

しかし易の本質とは關係の無いものでそれと結合せられた最も重要な思想は儒教である。易は *divination* の術である。吉凶を知り禍福を前知しようとするのが其の本旨である。世に處し身を保つには交渉があつても、もとより道義と相關するところは無い。ところが繫辭傳の或る部分及び文言傳に於いては、易を儒家眼から見てそれを聖人の作とし、又た教の含まれたものとし、それについて孔子の言といふものを多く記してゐる。易はそれ

によつて儒教に取入れられてしまつた。もつとも儒教思想は家傳及び象傳に於いて既に存在してゐるので、家傳に於いては豫、頤、咸、恒、革、鼎など、象傳に於いては觀、豫、臨、復などの條にそれが見え、聖人もしくは先王が、或は上帝を祀り、或は民を教化し、天下を和平にする、といふやうな考が現はれてゐるし、特に革の家傳には湯武の革命が説かれ、堯典にあるやうな治歴明時のことさへ述べてある。また隨及び升には文王の話があり、明夷には箕子の名が見えるし、其の他、君子小人の語などは到るところに出てゐる。こゝに易と儒教との結合はあるが、しかしそれは或る卦もしくは爻の意味を説くに當つて此の教の思想を取り或はそれを借りたのであつて、易を聖人の作としたのでは無く、易全體を教の道具と見たのでは無い。ところが繫辭傳の或る部分などはそれとは違つて、上記のやうに説いてゐる。これは恐らくは儒家のしごとであらう。然らば儒教と易との此の結合は何時から行はれたであらうか。それについて考ふべきは、漢書藝文志に、易は卜筮の書たるがために秦火を免れたといふ記事のあることである。史記始皇本紀及び李斯傳には卜筮の書は禁ぜられなかつたのである。これがもし眞であるならば、當時の易は儒家の經典とはせられてゐなかつたのではあるまいか。漢代のものには必ず詩書禮樂と易と春秋とを經典として列擧してゐるのに、荀子の勸學篇および儒效篇の經典を列擧してあるところには易の名が見えない。非相篇に易を引用してゐるに拘はらず。これは偶然のことでは無いのではあるまいか。六經とか、それと同じ意味でいふ六藝とか、の名も漢代にはじめて現はれたものではあるまいか。藝文

志のいふところは、易は儒教の經典ではあるが卜筮の書であるために禁ぜられなかつた、といふ意であらうが、余は寧ろ、當時の易は儒教に關係の無い單純なる卜筮の書であつたらうと思ふ。藝文志の斯ういふ考説には信用しかねるものが多く、又た詩なども殆ど先秦時代のまゝ漢代に傳はつてゐるらしいので、所謂秦火が事實どれほどに儒教に災したかも問題であるから、それは且らく措くとしても、易については其の本質と荀子の記載とから見て上記の如く推測せられる。なほ藝文志には、儒者の六藝の一としての易の外に、數術家の著龜の條に易に關するものが數種見えてゐるが、これは儒家に屬せずして易を學び著筮を事とするものが多かつたので、主として其の方面に用ゐられたものらしい。さすれば、これは、儒教に取入れられた易は易の本系では無いので、儒教が如何にそれを取扱ふかに關せず、易は單純なる易として著筮家の間に傳へられてゐたことを示すものであらう。此の事實と、後にいふやうに漢代の中ごろまでは詩書禮樂の次に置かれた易が漢末になると經典の主位を占め六藝の本原とせられてゐることを併せ考へると、易が儒教に取入れられてから短い時間に一步、其の地位を進めていつたことが知られ従つて儒教と易との習合は近い世に行はれたものであることが推測せられる。易が遠い昔から儒家の經典と定まつてゐたならば、かういふことは無からうと思はれる。又た著筮と並び稱せられ、それよりも重んぜられてゐた龜卜の書が儒教に取入れられなかつたことをも考へねばならぬ。これは、後にいふやうに其の内容にもよることであるが、易の書が早くから儒教の經典であつたなら

ば、先秦時代の儒者が卜と筮とを同様に取扱ひ、特に筮よりも卜を重んずるやうな言をなしたことは、甚だ解し難くはあるまいか。余は斯う考へて、易が儒教の經典となつたのは漢代に入つてからのことでは無からうかと思ふ。従つて又た繫辭傳の儒教思想で書かれてゐる部分及び文言傳⁹⁾は漢代の作ではあるまいかと思ふ。繫辭傳の一節に包犧神農黃帝を堯舜の前に置いてあるが、これは本來、儒家で無い方面から出た説話上の古帝王であり、特に黃帝は五行思想の所産でありながら、それを尊尙するのは主として道家であつた。其の出現は戰國時代の中ごろ以後であらうが、儒家は戰國末までまだそれを取らなかつたらしく、荀子などにも見えてゐない。ところで、後にいふやうに、黃帝堯舜に關する繫辭傳の説には道家の思想も混入してはゐるが、包犧神農黃帝を古の聖人としてゐるところから見ると、其の文は儒家の手になつたものらしい。もしさうとすれば、これもまた繫辭傳の此の部分が漢代の作であることを示すものではあるまいか。(八卦の製作を包犧とし、六十四卦が神農の時、既にあつたやうに書いてゐるのは、易が儒教に取られない前からの思想であつて、それが即ち易が本來儒家のもので無かつた證據にもならう。史記の周本紀に見えるやうに、重卦を文王に歸したのは、孔子世家の説の如く十翼を孔子の作とすること、關聯して、儒家が在來の説を變改したのであらう。)或は更に臆測を進め、家傳及び象傳の儒教的分子にも亦た漢代の挿入があるので、無からうかと疑つてよいかも知れぬ。

なほ一言して置くべきは、易の儒教に取入れられたのが漢代に入つてからであるとする

ば、それは景帝のころより前に行はれた筈であるが、漢代の學界の形勢に於いてそれが有り得べきことであつたかどうかといふことである。史記には明白に易を孔子に附會してゐるし、武帝の初年の董仲舒の對策に易を引用してゐるのも、それを儒教の經典として見たからのことであらうから、時代については是非とも斯う考へねばならぬ。さて史記儒林傳によれば、孔子の學統を受けた易(易)をはじめて漢代に傳へたものは齊人田何であるといふ。同じ儒林傳に、儒生は齊魯の間に殘つてゐたやうに書いてあるが、著筮の書たる易は廣く世に行はれてゐた筈であるから、それが前から儒教の經典であつたならば、少くとも易を傳へてゐる儒者は漢初に於いて各地方から出て來なければならなかつたやうに思はれる。然るに、獨り齊人の田何が孔子の學統を傳へてゐたといふのは、易と儒教との習合が如何なる時代に如何にして行はれたかを暗示するものでは無からうか。なほ易の傳承の状態を考へるに、史記には此の田何が王同子仲に傳へ、子仲が楊何に傳へ、當時の易を説くものは楊何に本づいてゐるとある。ところが漢書儒林傳の説は少しく之と違つてゐるので、それによると、田何の門人には楊何の外に周王孫、丁寬、服生などがあり、前漢の中葉以後に勢力のあつた易の諸家は主として丁寬の系統に屬してゐる。史記に「要言易者、本於楊何之家」とあるのを漢書が其の前の數句を全く史記から寫し取つてゐるに拘はらず、「要言易者、本之田何」と書きかへたのも、此の故であらう。楊何は武帝の時、儒林傳には元光中とあり、仲尼弟子列傳には元朔中と見えるに、官に徵せられたといふから、司馬遷と同時の人であるが、丁寬も漢書によ

ると、景帝の時に梁孝王に仕へ、又た易說三萬言を作つたといはれてゐるから、やはり司馬遷に知られてゐたであらう。だから、寛がもし田何の門人であつたならば、司馬遷が何故に楊何のみを擧げたのか、不思議である。なほ史記によると、即墨成、孟但、周霸、衡胡、主父偃などは、何れも易に通じてゐたといふが、これらの諸家は、田何の門人では無いやうに見える。周霸は申公の弟子で詩を學んだといはれ、又た尙書をも説いたといふ、其の人らしく、又た主父偃は漢書卷六四に傳があるが、何れも田何に就いたやうなことは記して無い。それから、漢書の丁寛の傳には、寛が周王孫に從つて古義を受けたとあるが、王孫は田何の弟子であるといふのに、同門の丁寛がそれについて學んだとすれば、其の所謂古義は田何のとは傳統を異にする學說であつたとしなければなるまい。さすれば、漢代の易學はすべて田何から出たといはれないでは無いか。なほ韓嬰が易を傳へたといふ漢書の記事が、もし事實ならば、これも亦た田何の系統に屬しないものであらうか。かれこれ考へ合はせると、漢初の易の傳承には種々の疑問がある。少くともそれが判然しない。たゞ易を説くものは、少なくなかつたこと、其の間に於いて孔子の學統に屬するが如く主張してゐるものは、田何もしくは其の徒のみであつたこと、後になるほど田何の學統上の地位が重んぜられ、易の學はすべて此の人から出たやうに考へられて來たことは、ほゞ推知せられるが、これは即ち、易を儒教の經典として取扱ふことが、田何もしくは其の徒にはじまるのであつて、一般に儒家が世に用ゐられて來ると共に、此の田何の説が勢力を得、それにつれて、本來は純粹の著筮家であつたもの

が何れも其の説を取入れ、又な田何の學統に屬するが如くに誇稱するやうになつたことを示すものではあるまいか。儒家として史記の著者に認められなかつた丁寛などが漢書に至つて立派な儒林傳中の人となつてゐるのは、之がためでは無からうか。彼が眞に田何に就いて學んだかどうかも疑問であつて、漢書に記されてゐるやうな話は、丁寛の流を汲んでゐるものゝ造作に出でたことかも知れぬ。楊何よりも寧ろ先輩である管の此の人の名が史記に全く見えないことも、かう解する方が妥當であらう。さうして、斯ういふ事情の下に於いて丁寛がわざわざ周王孫から古義を學んだといふ話のあるのを見ると、それには事實の痕跡があるらしく、其の古義といふものは儒教に取入れられない、いひかへると儒教的分子の混入しない、易説であつて、王孫自身もまた恐らくは田何の徒では無かつたであらう。⁽¹⁾

余はかう考へて、史記と漢書との儒林傳に一致しない點のあるのは、易が漢代に入つてから儒教の經典とせられたといふ上記の臆説をたしかめる役に立つものだと思ふ。漢代に於いて儒教の經典が種々に造作せられ、而もそれが眞の古典として當時の人々に信用せられてゐたことは、人の既に知るところであるが例へば董仲舒の對策にも引用せられ、史記の周本紀にも取られてゐる泰誓が眞の泰誓で無いことは、今日から見ても明らかであるにも拘はらず、武帝の時代ですら疑はれてゐなかつたらしい一事によつてもそれを知ることが出來よう。古文尙書が孔壁から出たといふ話も決して事實とは思はれぬ。⁽²⁾ 所謂秦火の後の典籍の缺乏と紛亂と、並に儒生が世に用ゐられようとして種々の術策を弄した時勢とに於いて、

かういふことのあるのは、怪しむに足りなからう。特に易に關しては、やゝ後の孟喜や焦延壽が師承について或は詐言をなし或は假託して人を欺いたとが想起せられる漢書儒林傳。さて儒教と易との關係についての此の考は半ば推測によつて成立つてゐるのであるから、十分の確實性を有するものとしてそれを主張するわけにはゆかないかも知れぬ。が、よしそれにしても、戰國末よりも前から易が儒教の經典として取扱はれてゐなかつたことは、上記の考説から見ても疑があるまいと思ふ。齊に遊學したことのある荀卿が經典を説くに當つて易を度外視してゐるのは、少くとも其のころまだ一般には易が經典として承認せられてゐなかつたためであらう。易の今の形をなしたのが戰國の中期以後であるとすれば、單に其の點から、かう見なければなるまい。全體同じ占ひの書でありながら龜卜の儒家に採られずして著筮のが用ゐられたのは、易が理説を加へるに適してゐるからであつて、それは又た易が陰陽思想を基礎とし、又た複雑な數理的組織を有つてゐるためであらう。易そのものが、今の形に發展したのも實に之がためであり、従つてそれには、上にも述べた如く、實際の占ひには用の無い、知識上の詮索が含まれてゐる。さて政治の學であり、禮樂制度を以て世を治めようとする儒教が、孔子の後、一方では漸次内面化して孟子や中庸の如く人の性を論ずるやうになり、又た他方では、尙書の堯典に見えるやうに天文曆數の説を、或は洪範に現はれてゐるやうに五行説などを、取入れて來ると共に、儒教に反抗して起つた老子の思想さへも吸収するやうになり、時代⁽¹³⁾の經つに従つて儒者の學說そのものが、次第に變化も

し複雑にもなつて來たのであるが、この趨向は戰國時代の中葉、即ち孟子のころから後にずつと勢を加へたものらしく、それは此の時代の一般思想界の状態と相應するものである。さて陰陽思想は、一方では五行説と結合して益々それを發展させたのであるが他方では占筮法に新精神を與へ、それによつて易が形成せられるやうになつた。ところが上記の如き趨勢を以て進んで來た儒教は、此の易をも自家の藥籠中に取込まうとしたのである。だからそれは易が今の形に出來上がった後のことに違ひない。かういふ大勢の上から考へても易が儒教の經典となつたのは、如何に早くとも戰國末より前には溯り得ないことが知られよう。さうして、よしそれが戰國末であつたにしても、其のころにはたゞ儒者の或る一派に於いて用ゐられたに過ぎなかつたであらう。だから一般の儒者がそれを承認したのは、やはり漢代に入つてからのことではあるまいか。

なほ附言すべきは「易无思也、无爲也、寂然不動、感而遂通天下之故」とあり、黃帝堯舜垂衣裳而天下治」とあり、又は身を存し身を安んずることを説くなど、繫辭傳に道家の思想の加味せられてゐることであるが、これも亦た儒家に取入れられた道家の考がこゝに現はれてゐるのであつて、此の部分もやはり漢人の筆になつたものかも知れぬ。もつとも易と老子とは直接に結合せられ得べきものでもあるので、それは後漢から魏晋にかけて一般に行はれてゐたことであり、さうしてそれは、道家の力をこめて説いたことが主として身を保つの用意であり、此の點に於いて易とは本質的に共通なところがあるのと、道家の所説の根本をなす一

種の形而上學的思想が易の理論と接觸點を有するのと、の故であらうから、繫辭傳にも其の意味が潜んでもゐよう。然らば何故に漢代に於いて儒教が易を取り入れたか。或は儒教と易との結合が一般に承認せられたか。又た道家の思想がそれに結合せられたか。それは次章に述べるところによつてそのづから了解せられるであらう。

註

(1) 論語が孔子の言行を録したものととして悉く承認せられないことは、世に既に其の說があるが、舊來の考へ方とは別の觀察眼からも、さう見なければなるまい。このことについては他日卑見を述べる機會があらう。

(2) 象傳及び象傳に位の當否をいつてゐるところから歸納すると斯ういふことになるのであるが、ただ需の上六の象傳に「不當位」とある一條だけは之にあてはまらない。

(3) これは或は、前の例では乾下坤上の上六が下つて初六となり、其のために初九が九二になり九二が九三になり順次位が上つてゆくのので、九三は九四となつて上卦に入ること、後の例では坤下乾上の初六が上つて上六になり、それがために上九が九五、九五が九四と順次位が下り、九四は九三になつて下卦に入ること、として解釋せられなくも無いやうであるが、それでは離下艮上の貞に「柔來而文剛剛上而文柔」とあり、震下離上の「柔得中而上行」、また坎下巽上の「剛來而不窮」とあるなどの例を説明し難いから、それは無理であらう。

(4) 上記の恒や咸については剛柔を爻のこととせずして卦をさすもの、即ち陽卦陰卦の意味として説く正義の說があり、恒については王弼のいふところも其の意味らしいが、もしさう解すると、上下といふ語についての他の場合例へば无妄や訟や睽やの用例と矛盾を生ずる。のみならずこれでは

上下の語が上り又は下る義では無く、現在の上下の位置を示すこととなるのであるが、さういふ場合には、例へば訟に「上剛」とある如く「剛上」とは書かないのが普通のやうであるから、この點からも正義などの解釋は背ひ難い。もつとも上に述べた如く「應」といふ語の用例も一様で無く、又た内外といふ語を下卦上卦の意味に用ゐると共に、兌下兌上の兌に「剛中而柔外」といひ、兌下巽上の中孚に「柔在内而剛得中」といふ類の内外はそれとは義を異にしてゐるなど、術語が可なり放漫に用ゐられてゐるから、他の場合の用例のみで概論し去ることは出来ないが、王弼も正義も剛柔の上下を爻のこゝとして説いてゐるところが多いから、恒や咸についてもそれと同じに見た方が象傳の本旨にかなつてゐるのであらう。

(5) もし斯う考へることが出来るならば、こゝにもまた上下兩卦の升降しない前の状態に於いての卦が豫想せられてゐるので、そこにも一つの卦から他の卦への時間的變化といふ觀念が存在するのであるが、さういふ例の極めて少いところから見ると、恐らくは、さう明かに考へられてゐたのでは無く、その上卦もしくは下卦が、天地または水火といふやうな、升り又は降る性質を有する物象を象徴する場合に、其の卦の示す物象の升降といふ觀念が導き出され、それが又た卦そのものゝ上り又は下ることに轉化したに過ぎないので、無からうか。

(6) 繫辭傳の此の筮法が定められた時に變爻といふことが既に考へられてゐたとすれば、普通に説かれてゐる如く、九、六と七、八によつて變ずる場合と然らざる場合との區別がつけられるのであるが、それには、變爻の觀念が遅くとも漢初には存在してゐたとするが、但しは繫辭傳の此の部分の前漢末に補はれたとするか、どちらかを豫想しなければならぬ(繫辭傳の時代に關する後文の所説參照)。が、前の方は次章に述べようとするやうな理由から不可能と思はれるし、後の方も前漢の中頃には十翼が聖人の作として信ぜられてゐたらしいことから考へて成立ちかねよう。だから余は今のところ本文に述べたやうに臆測するのであるが、しかし、もつと根本的に考へるならば、あの分掛據抄の方法が何によつて案出せられたか、明かて無いので、しつかりした推論ができてきかれない。

である。

(7) 繫辭傳の首は禮記の樂記の一節と大同小異であるから、どちらか一方のを取り、さうして二三の文字を變改したものに違ないが、兩方を比べると、文章そのものに於いても前後のつゞきに於いても樂記の方が自然のやうである。繫辭傳の方が後に書かれたものらしい。

(8) 莊子の天運篇に「丘治詩書禮樂易春秋六經」とあり、又た天下篇にも「鄒魯之士縉紳先生」の明らめるものとして、やはり易を含んだ六經が擧げてあるが、莊子のこれらの篇は先秦のものであるとは斷言しかれる。禮記の經解にも亦た六經が悉く列べてあつて、而もそれが孔子の言となつてゐるが、これは漢人の作であらう。禮記の諸篇中には先秦のものもあるに違ないが、多數は漢代の作であつて、そこに見えろ孔子の言が概ね假託であることに異議は無からう。なほ此のことについては他日機を見て專見を述べようと思ふ。それから呂氏春秋(不苟論博志)に六藝とあるのが禮樂射御書數を指すものらしいことを考へるがよい。

(9) 諸學者の既に説いてゐる如く、文言傳のはじめには左傳襄公九年の條に見えるところとほぼ同じ文字がある。しかしこれは文言傳の作られた時代をきめるたよりにはならぬ。後文參照。

附記。序卦傳も亦た或は漢代に入つてからの作かも知れぬが、淮南子繆稱訓にそれが引いてあるが、それより前のものではあらう。序卦傳の所説は六十四卦が二卦づゝの三十二組になつてゐることを全く度外視してゐるから、さういふ配列法を取つたことが忘れられた後に書かれたものらしい。

(10) 史記儒林傳には孔子の門人商瞿から六傳して田何に至つたとあるが、其れについては仲尼弟子列傳と漢書儒林傳との間に一致してゐない點があるし、約三百年間に僅々六傳を數へてゐるのもおかしい(漢書儒林傳によれば田何から前漢末の京房まで約二百年間がてうど六傳になつてゐる)。易を孔子に歸することは問題では無いと思ふが、筆が傳統のことにふれたがら、一言して置く。

(11) 漢書藝文志には周氏、服氏、楊氏、韓氏、丁氏などの易傳の名が載せてあるから、漢末にこれらの書があ

つたことは確かであらう。此の中で韓氏易傳は漢書(卷七七)の蓋寛饒傳にそれが引用してある。但しこれらの書が彼等自身の筆になつたものか又は彼等の學派のものか作かはわからない。特に韓嬰が易を説いたといふことは史記の嬰の條には全く見えないのであるから、韓氏易傳が果して嬰の作であるかどうかは一層の疑問である。また劉向の七略には嬰が易の子夏傳といふものを作つたことが見えてゐるさうであるが、藝文志に其の名が出てゐないのは何故であらうか。子夏傳といふものは一行の大衍曆議にも陸徳明の釋文にも孔穎達の正義にも李鼎祚の集解にも引用してあるから、唐代までは存在してゐたに違ないが、劉向の言といふものもただけ信用のできるものか覺束ない。さて藝文志に見えるやうな諸家の易傳が今日に傳はつてゐるならば、よしそれが彼等自身の作で無いにせよ、それによつて本文に述べた余の臆説の當否を判断すべき何等かの材料が得られるであらうが、惜しいことにはそれが何れも亡くなつてゐる。もつとも、韓詩外傳に易に關する言が數ヶ所あり、特に謙の卦について孔子の言といふものをのせたところもあるから、それが果して韓嬰の書いたものであるとすれば、易に見える文字を孔子に附會して説くことは田何の學派に屬しないものに於いても行はれてゐたとしなければならぬやうである。しかし、これは必しも易を儒教の經典として取扱つたと解すべきものでは無いので、如何なる思想をも孔子の説とする儒者の習癖の一つの現はれと見て差支が無い。特に謙の語は道德的意味を含んでゐるから孔子に結合せられ易いのである(荀子宥坐篇、並に韓詩外傳卷三のそれから取つたと思はれる一節、など参照)。たゞ同じ韓詩外傳卷五に六經の文字の見えることは注意を要するが、嬰は田何よりは後輩であるから、其の學統を承けてゐなくとも、思想の影響は受けてゐたと解せられようし、又た現存の此の書が嬰の作そのまゝのものであるかどうか問題であるから、此の一語によつて多くをいふことが出来ぬ。なほ此の書には繫辭傳の一句を引いてゐるところもあるが、それは儒家の所説とは交渉の無い文字である。

附記。今世に行はれてゐる陸賈の新語(道基および術事の篇)に「後聖乃定五經、明六藝」また「校修五經

之本末の句があつて、其の五經は六經から樂を除いたものであり、六藝はそれを含んだ六經を指してゐるのかと思はれるが、もしさうとすればこれは、易が漢初から既に儒教の經典になつてゐたことを示すものゝやうである。が、此の書は、世に既に其の説のある如く、陸賈の原本とは思はれないから、さうはいひかれる。慎微の篇に「入深山求神仙の語があるが、こんなことは陸賈の時代にはれる筈が無い。又た賈誼の新書(六術及び造徳説の篇)にも易を含んだ六藝のことが説いてあるが、此の書の疑はしいことも亦た既に人の知るところである。

(13) (12)
このことについては別に述べる機會があらう。
「老子」の書の作られたのは孟子よりは後であらうと思ふ。また荀子の性惡説は、其の禮樂制度を聖人の造作であるとする點に於いて「老子」の思想の影響を受けてゐると見なければならぬ。なほ道家の思想を儒者が取入れたことは論語などに於いても見ることができる。これらのことについても亦た別に説かうと思つてゐる。